

ともに暮らす

松尾 淳子（東京都）

3・11東日本大震災。阪神や新潟の震災の時に比べ、大きなショックを受け、何かしなくては、という衝動にかられた。なぜか？それは、私が「母親」になっていたからだ。

東京で自宅近くの公園に5歳のわが子といた私は、初めて経験する大木の揺れや、不安顔で近隣の住宅から公園に集まってくる母子を見て「ただごとではない」と感じた。

震災の様子が次々明らかになり、「小さい子を連れたお母さんや妊婦さんはどんなに困っていることか」と、胸が締め付けられた。避難所への移動、居場所、体

調の変化、食事、ミルク、おむつ。日常生活でさえ、子どもとの暮らしは周りに気を遣い、手のかかることが多いのに、この状況とは。

東京まで来られるのなら、自宅の一室を提供してお母さんと子どもに使ってもらおう。できうるかぎりの、ケアをしよう。でも、どうしたらいいのか？

知人からの情報で、東京助産師会の里帰りプロジェクトに協力の申し出をし、8月に第3子の出産を控える母子避難家庭との縁を頂いたのが、初夏のころ。自宅の提供ではなく、避難先の住宅に通って手伝いをするようになった。私にとって、新しい家族ができたような思いだった。

赤ちゃんを迎える準備に喜びを感じる一方、妊娠中に被曝したのではないかという不安、避難暮らしの心もとなさ、故郷に残る家族の心配や事故への怒り。本当に多くの悩み、苦しみを抱えた中で、

出産と3人の育児。私には解決はおろか、

その思いを理解することも難しい。であるなら、「東京での生活が、少しでも心落ち着く、おだやかなものになるような」支援をしよう、と心に決めた。

日常の家事の手伝い、赤ちゃんの世話、上の子たちの預かり、外出の同行。わが子が学校にいる間、時にはわが子も一緒に、適度なおせっかいをしながら、近くに住む親せきのおばさんのような気持ちで日々をともに暮らしている。

ふと気づくのは、自身がこれまでファミリーサポートや子育てひろばでスタッフの方々に頂いた心遣いやほっとした言葉だけが、自然に出てくるということ。「困っちゃうよね。でも、それで大丈夫よ」とか、「お姉ちゃんは弟をよく面倒見ていたよ」「弟はお片付けが上手になって、約束も守れてびっくりしなかった」といったことが、実感とともに口をつき、自分でも驚く。思

返しのような気持ちになる。

東日本大震災の被災地域では、同じ敷地やスーパの冷めない距離に、両親、子ども世帯、親せきが居住し、大きな家族のような営みのもとで助け合って暮らしているケースがあり、核家族、単身家庭が多い都市部と大きな違いである。子育てに限って言えば、父母の用事や休息のための預けあいや、親代わりになる祖母、親せきが身近にある。今回のように、突然に故郷を離れ、母子・父子の形で避難している世帯にとって、避難先でも「ともに暮らす家族」のような、支援や関わりがあってほしいと願う。

